学校を単位とした授業研究プロジェクト
ー　西都市立三財小中学校 2020 年度プロジェクト　ー

竹内元[i)]・椋木香子[i)]

実践報告要旨

本実践報告は、西都市立三財小中学校と取り組んだ学校を単位とした授業研究プロジェクトの報告である。本プロジェクトは、西都市立三財小中学校に所属する教諭に対する道徳授業の授業力向上のためのフォローアップと小中一貫校の校内研修の活性化を連動させた取り組みであり、道徳の教科化と「主体的・対話的な学び」といった現代的課題や教育改革の動向に対応した力量を形成しようとするものであった。専門領域を異にする複数の大学教員の参画が多角的な視点からの指導助言を成立させ、道徳の発問づくりのあり方や価値のとらえ方のみならず、小規模校であるがゆえに、発言形式が定着すると崩しにくいといった学級づくりの課題に対応するものとなった。

本プロジェクトは、一人の教科担当者だけでなく、複数の大学教員が研修に関わることによって、様々な角度から学校改善にアプローチできる可能性を示した。また、年間数回に渡って学校に関わることで、これまで行ってきた授業力向上フォローアップ事業よりも、効果的であると考える。

１．概要

本プロジェクトは、西都市立三財小中学校が西都市教育委員会を通して宮崎大学教育学部附属教育協働開発センターに依頼してきたものを、教職高度化コース教育課程・授業研究分野で対応したものである。学校の小規模化による宮崎県の公立学校が抱える課題に対して、教職大学院の知見と組織を活用し、地域の現職教員の研修機能を強化する取り組みである。なお、本プロジェクトは、西都市教育委員会と本学大学院教育学研究科との連携の一環である。

本プロジェクトは、西都市立三財小中学校に所属する稲田明香教諭の道徳授業の授業力向上のフォローアップと小中一貫校の校内研修の活性化を連動させた取り組みであった。稲田教諭は、平成 28 度教育課程・学習開発コース修了生であり、本プロジェクトは、道徳の教科化と「主体的・対話的な学び」といった現代的課題や教育改革の動向に対応した力量を形成しようとするものであった。研修は、道徳の発問づくりのあり方や価値のとらえ方のみならず、小規模校であるがゆえに、発言形式が定着すると崩しにくいといった学級づくりの課題に対応するものとなった。専門領域を異にする複数の大学教員の参画により、多角的な視点からの指導助言となった。なお、今回は院生が教育実習期間のため継続的に参加させることは成立せず、少人数の院生と学生をそれぞれ引率するものとなった。

西都市立三財小中学校は、平成 25 年度に開校した一体型小中一貫校である。小学校も含めて各学級に副担任を置くとともに、小学校 1 年生から 4 年生のジュニアステージ、小学校 5 年生から中学校 1 年生までのミドルステージ、小中学校 2 年生と 3 年生のトップステージに分かれて、職員研修や相互授業参観を行っている。令和 2 年度の児童生徒数は、186 名であり、内訳は表 1 の通りである。教職員数は、26 名である[1)]。

---

i) 宮崎大学大学院教育学研究科

【表１　西都市立三財小中学校令和２年度児童生徒数】

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	特別支援（小学校）	特別支援（中学校）
生徒数	17	16	28	14	26	21	20	25	19	15	3
学級数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2

２．実施日と内容

〈第１回〉
日時：2020年９月16日（水）
場所：西都市立三財小中学校５年生教室及び多目的室
内容：道徳校内研修
単元：友情を深める［B-(10)　友情、信頼］
資料名：言葉のおくりもの（学校図書「かがやけみらい」5年）
講師：椋木香子（宮崎大学大学院教育学研究科・教授）、竹内元（宮崎大学大学院教育学研究科・准教授）
対象：学校職員24名／学部４年生２名、学部１年生２名
備考：授業づくり（指導案作成を含む）の事前指導を対面で1回、メールでのやり取りで1回行った。
〈第２回〉
日時：2020年10月６日（火）
場所：西都市立三財小中学校５年生教室及び多目的室
内容：西都市小中学校道徳部会研究授業
単元：誠実に向き合う（内容項目：A-(2)「正直、誠実」）
講師：椋木香子（宮崎大学大学院教育学研究科・教授）
対象：学校職員約５名／西都市内小学校道徳主任約15名／院生２名
備考：授業づくり（指導案作成を含む）の事前指導を対面で1回、メールでのやり取りで1回行った。事後研究会を11月14日（土）に実施した（院生１名、学部生１名が参加）。
〈第３回〉
日時：2020年11月11日（水）
場所：西都市立三財小中学校多目的室
内容：主題研修ワークショップ：「主体的・対話的な学び合いを促す指導の在り方」
講師：竹内元（宮崎大学大学院教育学研究科・准教授）
対象：学校職員24名

３．成果と課題

道徳授業研修においては、大学教員が参加することで、学校全体での共通理解が図られ、新しい道徳科の推進に取り組みやすくなったと思われる。また、第1回は椋木だけでなく竹内も参加したことで、教育方法学的視点からの問題点も把握することができ、第3回のワークショップにおける学校教育改善の手がかりも得られた。教科担当者だけでなく、複数の大学教員が研修に関わることによって、様々な角度から学校改善にアプローチできると考えられる。また、年間数回に渡って学校に関われる

ことで、以前までの単発のフォローアップ事業の形よりも、効果的であると考える。

本プロジェクトを実施するにあたっては、学校長のビジョンや研究主任等の課題意識をていねいに聞き取り、研修内容を設定したこともあり、「とても今日の研修はよかった」「分かりやすかった」と教職員には好評だった。また、研修方法をワークショップにしたことで、教職員同士で熱心に考え協議する体験を受けて、「ようやく、先生方と同じベクトルをもてた気がする」との感想もあった。「子どもたちとも同じ課題をもって、ともに授業改善していきたい」と今後の授業改善に前向きになる研修となっており、学校からの要望には応えることができたと思われる。

さらに、「主人公はどう思うか？」と問うのではなく、「あなたが主人公だったら･･･」と問うことで、自己とつなげて主体的・対話的な学びを促す発問の在り方や、これまでの道徳でタブーだと思われてきた「横書き」や「資料の分断」などを必要に応じて効果的に用いることなど、道徳の教科化により、指導方法の弾力化がすすめられていることについて共通理解ができた。また、道徳における話合いのあり方に課題を見出し、小中全学年を通して話合いの在り方を捉えなおす必要があることなどに気づかれている。さらに、道徳科の発問づくりについて、さらなる研修を求める声をもあがっている。授業者自身は、研究授業後にさらなる検討を加えることで、発問や活動の意図を整理することができており、自分の授業における課題を見つめる機会となった。

今後の課題として、教育委員会との連携強化について挙げておきたい。西都市はここ数年、夏に市全体での研修を実施しており、道徳科に関しても毎年講師として椋木が参加している。今年度はコロナの影響で開催されなかったが、このように研修と連動するようにプロジェクトを構成することも可能かと思われる[2)]。

４．注

1) 西都市立三財小中学校の児童生徒数の推移は、表 2 のとおりである。表 2 は、教職員録から作成し、平成 25 年度以前は、西都市立三財小学校と西都市立三財中学校の児童生徒数の合計である。

【表 2　西都市立三財小中学校の児童生徒数の推移】

年度	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
児童生徒数	463	418	391	357	324	300	279	276	281	283	286
年度	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	2
児童生徒数	265	266	255	248	243	235	219	206	204	199	186

2) 西都市では、三財小中学校のほかにも、茶臼原小学校、銀鏡学園も学校を単位とした授業研究プロジェクトを行っている。また、次年度も、西都市の教職員がすべて参加するブラッシュアップ研修会が計画されており、教育委員会が主催する研修会との関連性も視野に入れて学校を単位とした授業研究プロジェクトを推進・充実していきたい。